13. 言語文化研究院

Ⅰ　言語文化研究院の研究目的と特徴・・・・・13－２
Ⅱ　「研究の水準」の分析・判定・・・・・・・・13－４
分析項目Ⅰ　研究活動の状況・・・・・・・・13－４
分析項目Ⅱ　研究成果の状況・・・・・・・・13－14
Ⅲ　「質の向上度」の分析・・・・・・・・・・・13－21

Ⅰ　言語文化研究院の研究目的と特徴

１．研究目的

言語文化研究院の研究目的は、世界の多様な言語と文化と社会について実践的・理論的研究を推進し、その成果を通して日本及び国際社会の発展に寄与することである。

本研究院の構成とミッションは以下のとおり。

部門	講座	ミッション
言語環境学部門	言語教育学講座	教育の観点から言語及び言語環境の研究を行い、その研究成果を教育の実践に移す。
	言語情報学講座	言語が社会・文化の構築に果たす役割、複数言語の接触が惹起する諸問題を研究。
国際文化共生学部門	国際共生学講座	国際協力に係る諸問題を分析・検討し、国際協力における文化的・言語的側面の重要性の認識にたって、新たな国際協力学の構築を目指す。
	国際文化学講座	文化の多元性、文化間の接触といった観点を重視し、異なる地域文化の諸相を総合的・学際的に研究。
	国際教育 （特定研究教育講座）	上記両部門の研究目的と教員自身の研究領域とに鑑み、両部門教員と連携協力して研究を行う。

２．研究の成果に関する方針

本研究院教員は、下記の研究活動を行う。

①原著論文の刊行
②著書の刊行
③学会活動
④科学研究費その他の外部資金獲得による積極的な研究活動の推進
⑤研究成果の社会的還元

研究成果の中心は原著論文と著書（研究書、総説、啓蒙書、翻訳書、外国語学習関係図書・教科書、辞書等）である。特に語学関係図書と辞書の編纂は、本研究院に特徴的な研究成果である。グローバル化の急速な進展に伴う研究の国際化の重要性に鑑み、国際的な場での研究発表も推奨している。

部局の紀要及び研究叢書についての詳細は、「４．研究基盤整備に関する方針」を参照。

３．研究組織運営に関する方針

以下が研究組織運営方針である。

①各講座に研究領域を共有する教員を配置し研究活動を効率的に推進。
②研究戦略委員会を設置、学術書の出版、学術誌の刊行、部局の研究力向上のための活動（科研費申請関係 FD 等）を展開。
③広報委員会を設置、研究活動の広報活動を積極的に展開（例：研究成果をホームページで公開等）。
④研究力向上の観点から原則として博士号取得者を採用。選考においては原著論文だけでなく、研究書刊行の有無、科研費等の外部資金の採択状況を重視。
⑤母語話者教員（いわゆる「ネイティブ教員」）と連携し、より高い研究水準の達成を目指す。

４．研究基盤整備に関する方針

研究支援体制は以下のとおり。

①紀要『言語文化論究』を発行。掲載論考の質担保のため、原著論文の査読制を導入。査読者は２名、内１名は部外者。他に、所属教員を主体とする二つの研究会により、『言語科学』と『英語英文学論叢』の２誌を刊行。
②研究図書 FLC 叢書の刊行。研究戦略委員会が出版予定の図書の完成原稿を事前審査、出

版の可否を決定。

③『言語文化論究』（年２回）と FLC 叢書（年２～３点）の出版経費は財務委員会で検討。前者の経費は本研究院が負担。FLC 叢書刊行は、１件あたり 20 万円を部局が助成。現在まで既刊 11 巻。『言語科学』と『英語英文学論叢』はそれぞれの研究会が負担。

④部局の教育研究力向上に寄与する教育研究活動、国際学会・研究会の開催、国際学会での研究発表等に係る経費の一部を院長裁量経費から助成。

⑤科研費採択率の向上のため、研究戦略委員会を中心として関係情報の収集、本研究院教員への情報提供、科研費申請関係 FD を実施。

５．以上の研究目的と特徴は、本学の中期目標記載の基本的な目標「研究においては、卓越した研究者が集い成長していく学術環境を充実させ、世界的水準での魅力ある研究や新しい学問分野・融合研究の発展及び創成を促進する。また，環境・エネルギー・健康問題等人類が抱える諸課題を総合的に解決するための研究を強力に推進し、国際社会・国・地域の持続可能な発展に貢献する。」を踏まえている。

［想定する関係者とその期待］

本研究院が想定する関係者は以下のとおり。

①関係学会

・所属する学会での研究業績だけでなく、九州地域の基幹大学として、地方学会における研究リーダーたるべきことが期待されている。

②学部生・院生

・研究成果に裏打ちされた外国語教育その他の学部教育・学府教育を行うことが期待されている。

③地域社会

・地域社会や各国言語文化の窓口として、市民講座等を通じた研究成果の還元、また特に高校における英語教育のための教授法研究の還元が期待されている。

④国際社会

・各国・各地域の文化に深い認識をもち、また各国語に堪能な、国際協力・国際福祉等の領域での活躍、特にアジア諸国との連携と協力が期待されている。

Ⅱ　「研究の水準」の分析・判定

分析項目Ⅰ　研究活動の状況

観点１－１　研究活動の状況

（観点に係る状況）

１－１－（１）　論文・著書等の研究業績や学会での研究発表の状況

論文・著書等の研究業績及び学会発表状況は以下のとおり（資料１～４）。原著論文と著書（訳書・辞書を含む）を積極的刊行、国際学会での発表を重視する部局の方針に沿って堅実な研究発表が行われている。

平成 22～27 年度の論文発表総数は 284（査読有 154、査読無 130）（資料１）、**年平均 56.8 編の刊行数**である。同期間中の著書刊行数は 80（一般書 31、専門書 49）である（資料２）。著書（専門書）の内３は英語による図書、１は独語による。論文・図書出版により高度な研究活動を継続していると言える。

平成 22～27 年度の学会等口頭研究発表数は 304（国際 132［国内で開催された国際学会等を含む］、国内 172 である（資料３）。**学会発表の約 43.4％が国際学会・研究会での研究発表**（学会発表件数 304 の内、国際学会等研究発表数 132）である（資料３及び資料４）。口頭発表の４割強が国際的な研究発表であることが示すように、研究の国際化も高い水準に達している。

○資料１　論文の発表状況

部門	査読	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	合計
言語環境学	査読有	21	26	12	9	16	9	93
言語環境学	査読無	14	18	11	6	9	13	71
国際文化共生学	査読有	7	18	7	6	7	7	52
国際文化共生学	査読無	11	9	9	9	10	9	57
国際教育	査読有	0	2	2	2	2	1	9
国際教育	査読無	0	0	0	1	0	1	2
合計		53	73	41	33	44	40	284

○資料２　著書等の公表状況

部門	種類	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	合計
言語環境学	一般書	5	5	4	4	6	3	27*
言語環境学	専門書	4（1）	4（4）	3（1）	6（1）	2	6	25（8）**
国際文化共生学	一般書	1	0	1	1	1	0	4
国際文化共生学	専門書	5	6（1）	7（2）	1	1	3	23（3）
国際教育	一般書	0	0	0	0	0	0	0
国際教育	専門書	0	0	0	0	1	0	1
合計		15（1）	15（5）	15（3）	12（1）	11	12	80（11）***

*言語環境学部門・一般書合計 27 の内８は教科書。

**言語環境学部門・専門書 25 の内４は辞書。

**言語環境学部門・専門書 25 の内１は訳書。

***カッコ内の数字は、FLC 叢書の点数。FLC 叢書については、資料 18 参照。

○資料３　学会等研究発表の状況

部門	種類	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	合計
言語環境学	国際	9	4	7	11	12	16	59
言語環境学	国内	12	23	20	20	8	29	112
国際文化共生学	国際	4	3	5	5	8	14	39
国際文化共生学	国内	9	10	15	11	8	7	60
国際教育	国際	4	6	3	7	6	8	34
合計		38　(17)	46　(13)	50　(15)	54　(23)	42　(26)	74 (38)	304 (132) ＊

*カッコ内の数字は、国際学会等発表件数

○資料４　国際学会等研究発表場所（国別）

国	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	合計
アメリカ	2	1	2	1	2	8	16
アルバニア	1						1
イギリス		1		1		2	4
インド			2	1			3
オーストラリア		1		2	1	1	5
オーストリア		1				3	4
オランダ				2		1	3
カナダ					1	1	2
韓国	4	2	3	3	1	3	16
カンボジア					1		1
シンガポール	1					1	2
スペイン		1		1	2	2	6
台湾		1	1			1	3
中国	1	1	3	2	4	7	18
チリ						1	1
ドイツ	1					1	2
トルコ				1			1
日本	6	4	3	5	11	4	33
ニュージーランド			1				1
ノルウェー				2			2
フィリピン	1						1
フィンランド					2		2
フランス				1			1
ベトナム				1			1
ベルギー						2	2
マルタ					1		1
合計	17	13	15	23	26	38	132

１－１－（２）　研究資金の獲得状況

研究資金の受入状況は以下のとおり（資料５～８）。研究課題は言語教育、教材開発、言語学、異文化コミュニケーション、外国文学、異文化理解、国際協力等に亙る。

第１期中期計画期間中（平成 16 年度～19 年度）の科研費採択件数（新規・継続）は総計 45、年平均 11（第１期現況調査表６頁参照）。

一方平成 27 年度の採択件数（新規・継続）は 31（新規 14 件、継続 17 件。新規 14 件中１件は名誉教授の研究課題）。科研費申請資格を有しない外国人教師２名を除く**専任教員 48 名の採択率は、約 63%（30／48）**。平成 27 年４月１日着任（27 年度の科研費申請資格を持たない）承継教員（助教）１名を除く**承継教員 35 名に限れば、採択率は実に 74%強（26／35）**となる。科研費等の外部資金の獲得率の向上の取組が一定の成果を達成していると言える。

科研費「研究成果公開促進費による出版」については資料６、科研費以外の外部資金による研究成果については資料７を参照。

学内資金による研究活動も活発に展開している（資料８）。『九大英単―大学生のための英語表現ハンドブック』（研究社）の刊行は、その成果の一部である。

○資料５　科学研究費補助金獲得状況

研究種目	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	合計
基盤研究（A）							0
基盤研究（B）	1	1	1	1	2	2	8
基盤研究（C）	13	15	18	17	17	19	100
挑戦的萌芽研究		1	1	1	1	1	5
若手研究（B）	1	1		2	3	9	16
研究活動スタート支援			1				1
合計	15	19	21	21	23	31	130

年度	研究課題、研究種目、研究代表者
平成 22	１．「印欧語比較言語学理論に基づくゲルマン語動詞体系生成過程に関する研究」 基盤研究（C）（一般）、研究期間：５年、研究代表者：田中俊也 ２．「英国ルネサンス期における戯曲の版権に関する研究」 基盤研究（C）（一般）、研究期間：３年、研究代表者：太田一昭 ３.「マルチメディア外国語教材と学習者のインタラクションに関する言語行動学的研究」 基盤研究（C）（一般）、研究期間：３年、研究代表者：李相穆 ４．「初修外国語による携帯電話用表現モジュールの開発研究」 基盤研究（B）（一般）、研究期間：３年、研究代表者：Kasjan、 Andreas
平成 23	１．「現代英米児童文学における男装―その意味と変遷」 基盤研究（C）（一般）、研究期間：３年、研究代表者：谷口秀子 ２．「実践日本語ポライトネス技術訓練方法の開発」 基盤研究（C）（一般）、研究期間：３年、研究代表者：松村瑞子 ３．「文字チャットで発揮される能力と一般的英語能力との比較研究」 基盤研究（C）（一般）、研究期間：３年、研究代表者：鈴木右文 ４．「アメリカとコロンビアの連携事例による国際教育協力循環モデルの模索」 基盤研究（C）（一般）、研究期間：３年、研究代表者：鈴木隆子 ５．「ドイツ・日本の就学前児童保育における『ことばの発展支援』」 基盤研究（C）（一般）、研究期間：４年、研究代表者：恒川元行 ６．「18 世紀フランスにおける演劇モデルによる知の構築」 基盤研究（C）（一般）、研究期間：３年、研究代表者：阿尾安泰 ７.「ジャンルに基づくライティング指導が英語学習者の文章力と言語力の発達に及ぼす効果」 基盤研究（C）（一般）、研究期間：３年、研究代表者：保田幸子

	８．「濱文庫所蔵唱本目録の作成」 基盤研究（C）（一般）、研究期間：５年、研究代表者：中里見敬
平成 24	１．「1940 年代初頭の文学作品に見るアメリカ南部の文学的自画像に関する研究」 基盤研究（C）（一般）、研究期間：４年、研究代表者：小谷耕二 ２．「先進国における『社会開発志向コミュニティワーク』モデルの模索:日米の事例研究」 基盤研究（C）（一般）、研究期間：４年、研究代表者：稲葉美由紀 ３．「海外に興味をもたせ国際化推進を支援する教育方法の提案」 基盤研究（C）（一般）、研究期間：３年、研究代表者：古村由美子 ４．「上海のユダヤ人難民社会における生活再建に関する研究」 基盤研究（C）（一般）、研究期間：３年、研究代表者：阿部吉雄 ５．「自然科学とエゾテーリウムの『あわい』で―フェヒナーからフロイト、ベルクソンへ」 基盤研究（C）（一般）、研究期間：３年、研究代表者：福元圭太 ６．「言語構造に符号化された手続き的制約と語用論的推論についての研究」 基盤研究（C）（一般）、研究期間：４年、研究代表者：大津隆広 ７．「コンコード・エレミヤ―ソローの時代のレトリック」 基盤研究（C）（一般）、研究期間：３年、研究代表者：高橋勤 ８．「機関リポジトリを活用した大学別発信型語彙リストのオーダメイド作成法」 基盤研究（C）（一般）、研究期間：３年、研究代表者：徳見道夫 ９．「現代朝鮮語における〈n 挿入〉の総合的研究」 研究活動スタート支援、研究期間：１年、研究代表者：辻野裕紀
平成 25	１．「『初期英国演劇記録』分析による英国演劇団史研究」 基盤研究（C）（一般）、研究期間：３年、研究代表者：太田一昭 ２．「現代朝鮮語における〈濃音化〉の総合的研究」 若手研究（B）（一般）、研究期間：３年、研究代表者：辻野裕紀 ３．「アメリカ文学における契約の概念と保険思想」 若手研究（B）（一般）、研究期間：３年、研究代表者：下條恵子 ４．「途上国農村地域における初等教育の教育成果に関する調査―コロンビアでの追跡調査」 基盤研究（B）（一般）、研究期間：５年、研究代表者：鈴木隆子
平成 26	１．「議論教育のための対話型教材開発に向けた基礎的研究」 基盤研究（B）（一般）、研究期間：４年、研究代表者：井上奈良彦 ２．「現代英米児童文学におけるフェミニズム童話の意義」 基盤研究（C）（一般）、研究期間：３年、研究代表者：谷口秀子 ３．「18 世紀後半フランスの言語文化空間における読解性の構築」 基盤研究（C）（一般）、研究期間：３年、研究代表者：阿尾安泰 ４．「中国における日本近代文学受容の研究―魯迅・周作人編『現代日本小説集』を端緒として」 基盤研究（C）（一般）、研究期間：４年、研究代表者：秋吉收 ５．「日本人の言語行動におけるポライトネス異文化理解教育の方法論開発」 基盤研究（C）（一般）、研究期間：３年、研究代表者：松村瑞子 ６.「インタラクティヴなドイツ語作文添削システム及び web 学習システムの開発と評価」 基盤研究（C）（一般）、研究期間：４年、研究代表者：栗山暢 ７.「外国語としての英語ライティング力の発達:多角的分析に基づく言語的特徴の解明」 基盤研究（C）（一般）、研究期間：３年、研究代表者：保田幸子

	８．「Analysis of the Current Status of the Global 30 Program」 挑戦的萌芽研究、研究期間：３年、研究代表者：Aleles, Jonathan ---------- ９．「13 世紀－14 世紀初頭のアラゴン連合王国におけるムデハル観と国家観」 若手研究（B）、研究期間：３年、研究代表者：阿部俊大
平成 27	１．「マルチメディアを用いた外国語学習過程のモデル化」 基盤研究（C）（一般）、研究期間：３年、研究代表者：李相穆 ---------- ２．「座礁の文化史―アメリカン・ルネサンス文学と海難事故」 基盤研究（C）（一般）、研究期間：３年、研究代表者：高橋勤 ---------- ３．「現代アメリカ演劇における批評理論の活用に関する研究」 基盤研究（C）（一般）、研究期間：４年、研究代表者：岡本太助 ---------- ４．「ハンス・ドリーシュ『新生気論』の研究―『エンテレヒー』の行方」 基盤研究（C）（一般）、研究期間：４年、研究代表者：福元圭太 ---------- ５．「現代ロマンス諸語におけるテンス・アスペクト体系の対照研究」 基盤研究（C）（一般）、研究期間：３年、研究代表者：山村ひろみ ---------- ６．「ゲルマン語強変化動詞形態組織発展に関する比較言語学研究」 基盤研究（C）（一般）、研究期間：４年、研究代表者：田中俊也 ---------- ７．「名詞を核とするコロケーションの収集と整理―日独対照表現データベースの作成―」 基盤研究（C）（一般）、研究期間：３年、研究代表者：恒川元行 ---------- ８．「学術分野共通性を優先した修訂情報付き英語科学論文コーパスの構築」 基盤研究（C）（一般）、研究期間：３年、研究代表者：徳見道夫 ---------- ９．「Art of the Atomic Age」 若手研究（B）（一般）、研究期間：２年、研究代表者：Decamous, Gabrielle ---------- 10．「デジタル移行期におけるアメリカ映画産業と製作形態の変容に関する研究」 若手研究（B）（一般）、研究期間：３年、研究代表者：河原大輔 ---------- 11．「朝鮮語諸方言の形態音韻論的研究」 若手研究（B）（一般）、研究期間：４年、研究代表者：辻野裕紀 ---------- 12．「会話分析の手法を用いた中断節構文の機能の解明」 若手研究（B）（一般）、研究期間：４年、研究代表者：横森大輔 ---------- 13．「Dynamics of Change in Early English: Managing, Interpreting and Explaining Linguistic Data Using GIS」 若手研究（B）（一般）、研究期間：４年、研究代表者：Laker, Stephen ---------- 14．「CEFR レベルと意味内容の対応付け：フレーム意味論の観点から」 若手研究（B）（一般）、研究期間：３年、研究代表者：内田諭

○資料６　科学研究費補助金･研究成果公開促進費による出版

年度	研究代表者	図書標題	金額
平成 23	太田一昭	『英国ルネサンス演劇統制史―検閲と庇護―』	180 万円

○資料７　科学研究費補助金以外の外部資金による研究活動

年度	補助金	研究課題
平成 21-22	放送文化基金研究助成	インドネシアにおけるラジオ放送による公共圏の形成とローカル･アイデンティティの構築
平成 23-24	松下幸之助記念財団研究助成	立体映画の技術実践に関するメディア考古学的研究―コダック･コレクションの発掘調査を中心に―

平成 25	研究大学強化促進事業 研究者短期招聘・派遣プログラム	ディベート教育に関する国際共同研究プロジェクト（教育実践研究者招聘、研究図書出版、学会設立の準備）

○資料８　本学学内資金による研究活動

年度	補助金	研究課題
平成 23	九州大学全学教育改善・実施経費	全学教育科目「韓国語３」の教材開発
平成 24	九州大学全学教育改善・実施経費	初修外国語のためのモバイル学習環境の構築とコンテンツ作成
平成 24-25	九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト（P&P）	初修外国語による Web 教材の開発・発展研究
平成 24-25	九州大学教育の質向上支援プログラム（EEP）	低年次学生の英語語彙力増強の取組 本プログラムの成果として、平成 26 年３月に『九大英単―大学生のための英語表現ハンドブック』（研究社）を刊行
平成 26	九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト（P&P）	新自由主義経済化における文化産業のグローバル化をめぐる研究
平成 26-27	九州大学教育の質向上支援プログラム（EEP）	学術英語リーディング・リスニングの教育効果を高めるための教材開発領域横断型の英語読解聴解教材開発―CLIL（内容言語統合型学習）支援の取り組み―（平成 28 年７月にテキストを研究社より刊行予定）
平成 27-28	九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト（P&P）：つばさプロジェクト	文学から見るリスクマネジメント（代表） 文学作品におけるリスクのあり方に関する異分野融合的なアプローチ（文学・言語学・数学・政治学）で明らかにする試み。平成 28 年３月にワークショップ開催予定。
平成 27-28	九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト（P&P）：つばさプロジェクト	多次元型グラウンディッド・テキストマイニング（MGTM）を用いた「企業の社会的責任（CSR）」の異分野融合研究（分担） 法学、経済学、言語学等の視点から学際的に CSR を分析する。平成 28 年１月 30 日に「九州大学異分野融合テキストマイニング研究会シンポジウム ―テキストマイニングとデジタル・ヒューマニティーズ」を開催予定（言文共催）。

○P&P：（教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト）
　一定期間研究費等の重点配分を行い、教育と研究の一層の発展を図ることが目的。集中的支援による研究の発展を促すことで、新たな競争的資金獲得の原動力を付与。

○EEP（教育の質向上支援プログラム）
　平成 21 年度から実施。中期目標・中期計画に掲げる教育に関する目標・計画の達成に資する部局等の主体的な取組を支援。教員・組織の教育力の向上、教育改革の推進を目的とする。

１－１－（３）　共同研究活動

資料９～10 は共同研究の実施状況を示す。**中核をなすのは、言語教育の教材研究・開発**である。対象言語は、英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語、韓国語、日本語に亙る。英語 CALL 教材開発は 26 年度までに文法問題作成を終え、27 年度より本学の英語教育で使用されている。ディベートに関する共同研究は、科研費（基盤（B）：平成 26～29 年度）の助成を得た。この分野で蓄積された実践知の体系化、実際の議論の収集分析、対話型教材開発の基礎作りを目的とする。ディベートは本研究院が活発に実施している教育研究活動の一つで、本学が日本におけるディベート研究の拠点となることが期待される。

○資料９　共同研究の参加状況

年度	共同研究	研究実施状況
平成 21-24	国立国語研究所共同研究プロジェクト（独創・発展型）「日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成」（分担）	言語学、日本語学、日本語教育、対照言語学、第二言語習得研究、辞書編纂学、認知言語学、コーパス言語学などの最新の知見を取り入れ、「日本語学習者用基本動詞用法ハンドブック」を開発。
平成 24-27	学習者コーパスによる英語 CEFR レベル基準特性の特定と活用に関する総合的研究科（科研費基盤（A））（分担）	言語教育の評価指標として欧州を中心に広く使われている CEFR レベルと、文法項目や語彙項目などの基準特性を対応付ける研究。 内田 諭、「基本動詞のコロケーション難易度測定—CEFR レベルに基づくテキストコーパスからのアプローチ—」、『言語処理学会第 21 回年次大会発表論文集』、pp. 880-883、 2015.03. 内田 諭、「CEFR レベルに基づいた教材コーパス—レベル別基準特性の抽出に向けて」、『英語コーパス研究』、第 22 号、pp. 87-99、 2015. 03.
平成 24-27	第二言語ライティング研究の現代的課題と解決のための将来構想—東アジアからの発信—（科研費基盤（B））（分担）	東アジアの EFL 環境におけるライティング指導の実態を解明し、大学生のライティング能力及び言語的特徴について、東アジアにおける共通の、あるいは国ごとに異なる課題があるのか、あるとすればその要因はなにかについて調査。
平成 25-27	トゥールミンモデルの再検討（科研費挑戦的萌芽研究）（分担）	学際的な議論教育からのトゥールミンモデルの再検討と、新たな議論モデルの効果測定.　文献収集、研究会参加を通じ複数の議論モデルの比較分析を行った。
平成 26	中国四川省成都市、国立西南民族大学の涂鴻教授と、近代における日中文人の交流。	国立西南民族大学に赴き、「魯迅文学中的日本現代文学投影」「現代中国文学和日本文学的交流—以与謝野晶子的活動為中心」の二つの講演。平成 27 年３月『言語科学』第 50 号に涂鴻教授との共著論文「論中国現代詩人郭沫若 1949 年後詩作中的“紅色”思想変遷」を発表。
平成 26-28	CEFR 上位者のビジネス・プレゼンテーションのストラテジー調査と検証法の確立（科研費基盤（C））（分担）	CEFR レベルの上位に位置する学習者を対象とした、特にビジネス・プレゼンテーションの場面で使用するストラテジーの研究。現在、プレゼンテーションやスピーチなどのデータベース化を進めており、分析が進めば英語教育やアウトリーチ教育等への応用が期待できる。
平成 26-29	議論教育のための対話型教材開発に向けた基礎的研究（科研費基盤（B））（代表）	ディベート教育の分野において蓄積された実践知を体系化するとともに、実際の議論を収集分析し、対話型教材開発の基礎とすることを目指す。平成 26～27 年度：実践研究として日本語と英語におけるディベート集中講座を実施（データ収集も）。27 年 3 月：国際学会「ディベート教育国際研究会」を設立、第 1 回国際研究大会を開催。学会誌を創刊し投稿論文を審査中。本教育研究活動の成果として、平成 27 年 9 月、『ディベート教育の展望』（花書院）を刊行。本書は、日本・台湾・韓国における日本語ディベートの教育実践活動と「ディベート教育国際研究会」創設に至るまでの教育研究活動の成果をまとめ、今後の可能性を探るもの。
平成 27-28	競技ディベート実態調査（分担）	日本ディベート協会における、日本における競技ディベートの実態調査（全国初となる縦断的な実態調査）。平成 27 年度：九州大学他で開催されたディベート大会参加者を対象に質問紙調査を実行。

○資料 10　部内における共同研究（学内資金による研究活動は除く）

年度	共同研究	研究実施状況
平成 22-23	英語 CALL 教材文法問題作成	言語文化研究院で英語学を専門とする 4 名の研究者が、27 年度以降の学術英語１ CALL-A、 B で使用される英語の文法問題約 800 問を作成した。

平成 22-24	「**初修外国語による携帯電話用表現モジュールの開発研究**」（科研費基盤研究（B））（代表）	本研究は、Web サービスを利用した携帯端末用初修外国語（**ドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語、韓国語**）学習教材の開発研究。

１－１－（４）　研究の国際化に向けての取組・実績

資料 11 は研究の国際化に向けた教育研究の取組・実績を示す。研究内容は教材開発、東アジア学（九州とスペイン語圏との歴史的関係）、東アジアにおける日本語・日本文化研究、言語の変種と変化に関する研究、会話における相互的言語行為研究等多岐に亙る。海外の研究者との共同研究は、様々な言語・文化についての研究者集団である本部局の強みである。

○資料 11　研究の国際化に向けての取組、実績、取組

国・地域	取組の概要
ドイツ	平成 26 年、ルール大学の州立言語研究院と学術交流協定を締結、共同研究「初修外国語による Web 教材の開発・発展研究」を実施中。
スペイン	平成 26 年、バルセロナ自治大学翻訳通訳学部と国際交流協定を締結。26 年３月、同大学同学部で、本研究院他、複数部局の教員とスペインの大学教員による研究集会を開催。
中国、韓国	平成 11 年度より毎年、韓国仁川大学、中国上海外国語大学と「東アジア日本語・日本文化フォーラム」を開催、論集『東アジア日本語・日本文化研究』を年２回刊行。
イギリス、アメリカ等	言語の変種と変化（Language Variation and Change）に関する、英語による国際的な研究会を、平成 26 年５月伊都キャンパスで開催。英語によるこの研究会は、同年 10 月、翌平成 27 年５月にも開催。詳細は https://networklvc.wordpress.com/ を参照。
フィンランド	平成 26 年９月より日本学術振興会の二国間交流事業の枠内で「会話における言語と相互行為の「単位」：複数言語からの創発的アプローチ」というテーマで共同研究。相手先はヘルシンキ大学及びトゥルク大学。 ・平成 26 年９月：日本側の研究者チームがフィンランドを訪問、国際ワークショップ Matches and Mismatches of Units in Interaction（相互行為の諸単位における一致と不一致）をヘルシンキ大学で開催。 ・平成 26 年 11 月：フィンランド側の研究者チームを日本に迎え、国際ワークショップ Tight and Loose Grammar（緊密な文法とゆるやかな文法）を東京外国語大学で開催。 ・平成 27 年３月：日本側の研究者チームがフィンランドを訪問し、国際ワークショップ Units in responsive turns（応答ターンに見られる諸単位）をトゥルク大学で開催。このワークショップで発表された論文を集め、国際学術誌 Journal of Pragmatics の特集号として刊行するという提案があり、ジャーナル側から採択された（平成 29 年初旬刊行予定）。 ・平成 27 年７月：ベルギーのアントワープ大学で開催された第 14 回国際語用論学会で、日本・フィンランド合同チームのパネル Fixed expressions as units（単位としての定型表現）を開催。 ・平成 28 年３月：フィンランド側の研究者チームを日本に迎え、会話の中の名詞句に見られる単位性に関する国際ワークショップを慶應義塾大学日吉キャンパスで開催。 ・平成 28 年８月：日本側の研究者チームがフィンランドを訪問し、会話における単位の諸問題に関する国際ワークショップを開催予定。
台湾、韓国、中国	平成 26 年、ディベート及び議論教育を専門とする「ディベート教育国際研究会」を設立、研究大会、学術誌発行、実践研究の場としてのディベート講座を開催。
アメリカ	日米の議論学研究者とともに公共の場における議論の批判的分析を行い、平成 28 年６月、国際学会でパネルディスカッションを開催予定。 （http://www.icahdq.org/conf/）

１－１－（５）　その他の研究活動

その他研究活動の状況については以下のとおり（資料 12)。『日本語資料集』は、平成 22 年度から 26 年度までに計６冊（各巻総ページ数約 400～500）を刊行。

また、元九州大学教養部教授で中国演劇研究者の濱一衛（1909～1984）が 1934 年６月から２年間の北京留学中に収集した資料からなる濱文庫の中国演劇史研究の価値を、国内外の研究者及び一般市民にアピールする広報活動を展開した。

平成 27 年 12 月**『濱文庫所蔵唱本目録』**（花書院；FLC 叢書第 11 巻（資料 18)）を刊行。同書は、本学附属図書館濱文庫に所蔵される清末から民国時代までの唱本（演劇・説唱文芸の小冊子）**1,125 冊の書誌情報**を著録した目録。**日本国内の中国唱本コレクションとしては、早稲田大学図書館の風陵文庫及び東京大学東洋文化研究所の雙紅堂文庫に匹敵する規模でありながら、これまでその詳細は知られていなかった**。

○資料 12　その他の研究活動

年度	研究活動	研究実施状況
平成 19～現在	資料集の刊行（編集）	平成 19 年度以降年１冊『日本語資料集』（九州大学大学院比較社会文化学府）を発行している。
平成 23	濱文庫資料の展示	平成 23 年５月 10 日より 16 日まで、**紀伊國屋書店福岡本店**イベントスペースで行われた九州大学創立百周年記念・第 52 回附属図書館貴重文物展示「**九州大学百年の宝物：附属図書館貴重資料コレクション**」に出品。
平成 23	濱文庫展示会の企画・展示	平成 23 年 10 月８～９日開催の日本中国学会第 63 回大会（九州大学）において、九州大学附属図書館中央図書館で「濱文庫展示会」を開催。
平成 24	**濱文庫資料の展示、ギャラリートーク**	平成 24 年５月に行われた九州大学百周年記念・第 53 回附属図書館貴重文物展示「九州大学百年の宝物：附属図書館貴重資料コレクション」(5 月 12 日、百周年特別展示会場（旧工学部本館３階)、５月 16 日～５月 22 日、九州大学中央図書館）に出品。また、ギャラリートークとして「濱文庫の戯単（芝居番付）から見る京劇の全盛期」と題し、展示資料と関連する話題について、一般向け講演。**平成 24 年５月 16 日の『朝日新聞』（西部本社版）**26 面第２福岡「イイかも！」の記事「九州大の貴重資料コレクション：最高学府のお宝、胸高鳴る」に、左記展示会、及びギャラリートークが紹介された。同年**5 月 20 日 NHK 福岡放送局のテレビニュース・ラジオニュース**でも紹介された。 関連資料は以下を参照。 https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/collections/hamabunko

（水準）

期待される水準を上回る

（判断理由）

（１）高い研究活動の生産性を維持している。平成 22～26 年度の**論文発表総数は 284**（査読有 154、査読無 130)。**年平均約 56.8 編**の刊行数である（資料１)。同期間中の**著書刊行数は 80**（一般書 31、専門書 59）である（資料２)。

（２）内外の学会・研究会において活発な研究発表を行っている。平成 22～27 年度の**学会等口頭研究発表数は 304**（国際 132、国内 172)（資料３～４)。平成 22～27 年度中の**学会発表の 43.4%が国際学会・研究会での研究発表**である。端的に、研究の国際化も高い水準に達していると言える。

（３）科研費等、学部資金獲得状況も良好である。27 年度の科研費採択件数（新規・継続）は 31（新規 14 件、継続 17 件。新規 14 件中１件は名誉教授の研究課題)。科研費申請資格を有しない外国人教師２名を除く**専任教員 48 名の採択率は、約 63%（30／48)**。平成 27 年４月１日着任（27 年度の科研費申請資格を持たない）承継教員（助教）１名を除く**承継教員 35 名に限れば、採択率は実に 74%強（26／35）**となる。

（４）学内資金による研究活動も成果を達成している（資料８）。**『九大英単―大学生のための英語表現ハンドブック』の刊行**は、その成果の一部。『九大英単』については、「研究成果の学術面及び社会面での特徴を示す研究成果」（資料 20）も参照。

（５）共同研究活動も積極的に展開。特に本研究院の特徴を活かした英語教育、日本語教育関係教材開発に関する共同研究が活発である（資料９～10）。国際的な共同研究への取組も積極的に推進している（資料 11）。

（６）内外の注目を集めている研究活動（**濱文庫資料の展示活動**等）に主導的にかかわっている（資料12）。メディアでの報道は、研究成果の社会的還元という研究目的にも適っている。

分析項目Ⅱ　研究成果の状況

観点２－１　研究成果の状況

（観点に係る状況）

２－１－（１）　学部・研究科等の組織単位で判断した研究成果の質の状況

研究成果の質の状況は、資料 13～18 のとおり。資料 13～17 は、「優れた研究業績」と判断されるものである。その選定基準は以下のとおり。

資料番号、業績の種類	選定基準	選定業績数
資料 13　受賞	内外の権威ある学会による受賞研究業績	1
資料 14　組織単位での研究成果の質の高さを示す論文等	評価の高い国際学術誌・論文集掲載論文。国内誌の場合当該分野の最高評価の雑誌掲載論文	10
資料 15　同上	書評対象となり、ピアによる高い評価を得た著作	6
資料 16　同上	代表的な国際学会における研究発表（シンポジウム・招聘発表）	4
資料 17　研究成果の質の高さを示すその他の研究活動	主として本研究院教員が企画・運営し、その成果が公刊された（あるいは公刊が見込まれる）もの	1

研究業績は、英語教育、言語学、中国文学、ヨーロッパ文学・文化研究、アメリカ文学、環境文学に亙っており、多様な教育研究活動において堅実に高い評価を獲得している。

資料 18 は本研究院が刊行助成している FLC 叢書リストである。最新刊の『濱文庫所蔵唱本目録』（平成 27 年 12 月刊行）は、新聞・テレビ等でも報道された。

資料 19 は本研究院教員の学会役員就任状況を示す。本研究院の教員の多くが関連学会の役員を歴任している。

○資料 13　研究業績による受賞

年度	氏名	受賞した賞と対象業績
平成 23	岡本太助	日本アメリカ文学会・新人賞 What to Narrate、How to Narrate: A Formal Analysis of Suzan-Lori Parks’s *The America Play*（*The Journal of the American Literature Society of Japan*、No.　６所載原著論文）

○資料 14　組織単位での研究成果の質の高さを示す論文等

年度	研究者（著者）	標題	掲載誌・図書	研究概要（研究内容、外部評価等）
平成 23	Yasuda、Sachiko	Genre-based tasks in foreign language writing: Developing writers’ genre awareness、linguistic knowledge, and writing competence	*Journal of Second Language Writing*、vol. 20、 pp. 111-33、June 2011.	選択体系機能言語学に基づくジャンル・アプローチを取り入れた１年間のライティング授業で、学習者の文章力及び言語能力がどう変化したかについて報告したもの。本論文により、ジャンル準拠の新しいライティング指導法の重要性が日本を始めとする EFL 環境でも注目されつつある。掲載誌は当該分野における Q１誌。本論文は、同誌 20 巻所載論文 27 編中第４位の引用数である。
平成 25	田中俊也	ゲルマン語強変化動詞Ｖ類過去複数形に散発的に見られる語根末摩擦音の有声化	日本歴史言語学会『歴史言語学』第２号 pp.３-20、平成 25 年 11 月	日本歴史言語学会第２回大会（平成 24 年 12 月８日）で口頭発表した原稿に加筆修正を施した論文である。同学会機関紙『歴史言語学』は審査基準が厳しいことで知られ、採用論文数は極めて少ない。第２号で採用された論文は、左に上げた論文

		について：*wes-‘be、 stay、dwell’の事例を中心に		**を含めて２点のみ**である（第１号、第３号も、査読採用論文は２点のみ）。
平成25	Abe、Toshihiro	Del obispado condal al obispado autonómico: el desarrollo de la relación entre el conde de Barcelona y la Iglesia como sistema de poder en siglo XII	*Acta Historica Archaeologica et Mediaevalia*（バルセロナ大学地理歴史学部）、31（2011-2013）、pp. 163-188、2014年２月	掲載誌（邦語タイトル『考古学及び中世史歴史研究』）はスペインの古代から中世を扱う歴史研究の専門雑誌として**、当該分野で最も評価が高い国際学術誌**の一つであり、**日本人の論文が掲載されるのは極めて異例**である。キリスト教勢力とイスラーム勢力が対峙する中での政治と宗教の関係を多角的に分析し、中世バルセロナ地方の政治構造の特色を解明している。
平成25	Takahashi、Tsutomu	Minamata and the Symbolic Discourse of the South	*Ecoambiguity、Community、and Development: Toward a Politicized Ecocriticism*（Lexington）、pp. 59-68、February 2014.	インド工科大学マドラス校 Swarnalatha Rangarajan 教授より**日本の環境文学について寄稿の要請があり投稿**し、左記国際論文集に掲載されたもの。書誌情報は、下記 URL 参照。https://rowman.com/ISBN/9780739189085/Ecoambiguity-Community-and-Development-Toward-a-Politicized-Ecocriticism#
平成25	秋吉 收	魯迅と佐藤春夫――散文詩集『野草』をめぐって	『東方学』第126輯（東方学会）、pp. 106-123、2013年７月	『日本中国学会報』と並び日本における中国研究雑誌の**最高レベルの雑誌『東方学』**（台湾行政院国家科学委員会の日本人文科学部門雑誌ランク１位など）に掲載。魯迅文学芸術の最高峰（竹内好）と称される散文詩集『野草』について、そこに少なからぬ日本近代文学の影響が認められることを実証的に明らかにしたもの。
平成25	Laker、Stephen	The downfall of dental fricatives: Frisian perspectives on a wider Germanic trend	*Amsterdamer Beiträge zur älteren Germanistik*（Rodopi）、73、pp. 261-300、January 2014.	英語と同系のゲルマン語であるフリジア語の音韻論研究論文である。掲載誌は、**アムステルダムで刊行されている国際誌で、重要な音韻論関係専門誌**の一つ。論者は、これまでの歴史言語学的研究における傑出した成果により、2012年には、香港大学及び千葉大学（日本歴史言語学会第２回大会）で**招聘講演**を行い、アングロ・サクソン人の侵攻以降ブリテン島において生じた、ケルト語と（古）英語との言語接触が英語の音韻システムの発達に与えた影響について研究成果を発表した。
平成26	秋吉 收	“雑文家”魯迅的誕生	『韓中言語文化研究』第36輯（韓国中国言語文化研究会）、第36輯、pp. 197-214、2014年10月	魯迅文学の実際を正面から評価することの意義を実証的に考察した。掲載誌は、**韓国での最高レベルの学術刊行物「韓国研究財団核心一級刊行物」**に認定される。
平成26	中里見 敬	濱一衛所見1930年代中国戯劇：一個開拓表演史研究的日本学者	『文化遺産』2014年第4期（総第31期）、pp. 109-117、2014年７月	論考は、中国戯劇史国際学術研討会暨中国古代戯曲学会2014年年会（平成26年４月６日、中国・光州市）での口頭発表に基づく。本発表は福満正博氏執筆の「中国戯劇史国際学術研討会暨中国古代戯曲学会2014年年会成功挙行」（『日本中国学会便り』2014年第２号）、及び陳志勇、潘培忠氏執筆の「中国戯劇史国際学術研討会暨中国古代戯曲学会2014年年会成功挙行」（中国非物質文化遺産保護与研究網）において**取り上げられた**。戦前の日本人学者が、当時の中国劇壇を記録する貴重

				な研究を残していたことを発掘した点が高く評価され、中国・中山大学中国非物質文化遺産研究中心の発行する一流**国際学術誌（核心期刊）に論文が掲載**された。
平成26	中里見 敬	通過日本明治時期《茶花女》的翻訳重估林紓《巴黎茶花女遺事》	『中国古代小説戯劇研究』第10輯、pp. 53-63、2014年12月	論考は、第４届中国文体学国際学術研討会（2013年、中国・中山大学）での口頭発表に基づく。何詩海氏執筆の「第四届中国文体学国際学術研討会綜述」(『文学遺産』2013年第４期）において本発表が**取り上げられた**。デュマの『椿姫』が明治日本及び清末の中国でどのように翻訳、受容されたかを比較文学的に考察した点が評価され、中国蘭州の甘粛人民出版社が発行する**国際学術誌に掲載**された。
平成26	Yasuda、Sachiko	Exploring changes in FL writers' meaning-making choices in summary writing: A systemic functional approach.	*Journal of Second Language Writing*、vol. 27、105-21、March 2015.	**掲載誌は、当該分野において最も評価の高い国際学術誌**のひとつであり、応用言語学、ライティング部門では最も採択率の低いジャーナルとして知られる。厳正な審査に適切に対応し、高い評価を得て掲載が認められたものである。

○資料15　組織単位での研究成果の質の高さを示す著書等

年度	研究者（著者）	標題	出版社	研究概要（研究内容、外部評価等）
平成22	Tanaka、Toshiya（単著）	*A Morphological Conflation Approach to the Historical Development of Preterite-Present Verbs: Old English*、*Proto-Germanic*、*and Proto-Indo-European*（The Faculty of Languages and Cultures Library II)、 xiii + 320 pages.	花書院（FLC叢書Ⅱ)、320 pp.、平成23年3月	古英語及び他のゲルマン語の動詞体系に存在する過去現在動詞の史的発達について、従来の学説を批判的に検討し、新たに「形態的混交説」からの説明を提案した論考。国際的に権威ある歴史言語学関係専門誌に掲載された**３編の書評において、本書は高い評価**を受けている。本書は近年の欧米での重要な著作、論文にも引用されている。本書の国際的評価の詳細は、次のURLを参照。http://www.flc.kyushu-u.ac.jp/~toshiyat/appendix.html
平成22	濱 一衛（著訳)、中里見敬（整理）	『中国の戯劇・京劇選：濱一衛著訳集』	花書院（FLC叢書Ⅲ)、354 pp.、平成23年３月	『東方』第368号（平成23年10月）に有澤晶子氏による本書に対する**書評**「時を超える舞台への探求心:『中国の戯劇・京劇選:濱一衛著訳集』」が掲載され た。学界に知られていなかった濱一衛の未刊原稿を発掘した点、京劇を本格的に紹介した著書である点、これまで未訳であった京劇台本を翻訳したものである点などが、**中国演劇の専門書として高く評価**された。
平成23	太田一昭（単著）	『英国ルネサンス演劇統制史――検閲と庇護――』	九州大学出版会、448 pp.、平成24年3月（平成23年度科学研究費・研究公開促進費による出版）	近代初期英国の演劇統制の歴史を実証的に跡付ける包括的研究書。「エリザベス女王期の演劇と政治・官僚機構との関係を浮き彫りにする**好著**」（『演劇学論集』55号)、「日本におけるこの時代の演劇研究の広がりと深度を如実に示す**秀作**」（『英文学研究』第90巻、「2012年度の**シェイクスピア研究の最大の成果**」(『英語年鑑』[研究社、平成25年]）と高く評価され、日本シェイクスピア協会・日本英文学会より、平成27年度シェイクスピア祭の**講演を依頼**された。http://www.s-sj.org/wp-

				content/uploads/2015/03/2015 ShakespeareFestivalPoster.pdf
平成24	高橋 勤（単著）	『コンコード・エレミヤ――ソローの時代のレトリック』	金星堂、283 pp.、平成24年６月	「週刊読書人」（平成24年）『英文学研究』（平成26年）『アメリカ文学研究』（平成25年）等国内の代表的な**学会誌５誌 に書評**が掲載され、「週刊読書人」では「ソローの脱神話化」をめざした「**大作**」との高い評価を得た。
平成25	大津隆広（単著）	『発話解釈の語用論』	九州大学出版会、221 pp.、平成25年５月	会話の含意や発話行為などの語用論の重要課題、談話連結語や照応の認知プロセスなどを関連性理論に基づき分析した研究書。**書評**において、「文法化を含む意味論と語用論の接点現象、発話行為や命題態度、認知語彙論などの語用論研究が推進していくことを確信させるパースペクティブをもった書」（日本語用論学会機関誌『語用論研究』16号［平成27年］）、「**語用論研究における長足の進歩を実感させる」（『英語年鑑』**［研究社、平成27年］）と紹介されている。
平成26	津村正樹（翻訳）	クリストフ・ハイン著『ホルンの最期』	同学社、334 pp.、平成27年２月	1985年に成立した旧東ドイツの問題作の小説を翻訳し、日本の読書界に問うたもの。「週間読書人」（平成27年４月10日号）に**書評**が掲載され、「誤読された遺志――80年代東独文学の到達点の一つ――」として紹介された。**「図書新聞」**（平成27年６月６日号）に**書評**（「さまざまな層の『抑圧』の風景」）が掲載され、**貴重な訳書**として高い評価を得た。

○資料16　組織単位での研究成果の質の高さを示す学会報告等

年度	研究者	標題	学会名	研究概要（研究内容、外部評価等）
平成23	Ao、Yasuyoshi	Les analyses de Samuel-Auguste Tissot	13th International Congress for Eighteenth-Century Studies、Graz、 Austria、July、 2011	４年に１度開催される「**国際的18世紀研究集解**」において、18世紀における文学と医学の関係に関するシンポジウムを企画した。発表者にフランス人研究者も加え、**全員フランス語**で発表を行った。論者は、18世紀に絶大な名声を博した医師であるティソが今日ほとんど忘れ去られている事実に注目しながら、その忘却の底に潜む18世紀的な知のあり方と現代的な知のあり方の相違を分析し、そこから導かれる考察を示した。
平成24	佐藤正則	ロシア宗教哲学者と世界戦争：ベルジャーエフの場合	ロシア史研究会2014年度大会、（平成26年10月、日本大学）	学会全国大会のメインの共通論題「第一次世界大戦とロシア社会」の**発表者・パネリスト**として発表と討論を行った。学会委員会からの依頼によるものである。発表では、宗教哲学者ベルジャーエフが第一次世界大戦にいかなる意義付けを与えこれを支持したのか、また、世界戦争がベルジャーエフの世界観にどのような変化をもたらしたのかを探求した。
平成25	Otsu、Takahiro	The Procedure Encoded by the Structure of the Linguistic Expressions	13th International Pragmatics Conference（2013、 New Delhi）	英語の動詞句照応、省略、直示表現を例に、言語の構造がそれを含む発話の解釈に貢献する手続き的制約について説明する。それらの解釈は言語的糸口に基づくという点で意味充足という認知プロセスが関わる。開催組織であるThe International Pragmatics Associationは世界60ヶ国以上の国の1、200人以上の語用論研究者からなる組織であり、隔年で開催されるInternational Pragmatics Conferenceは語用論では**最大の国際学会**である。
平成26	Yokomori、Daisuke、Eiko Yasui、and Are	Registering a chunk of information with a stance: A	Symposium on Units in Responsive turns（March 2015、 Finland）	日本語の日常会話において、相手の発言内容を受け取ったことを示すために相手の発言の一部を繰り返すという振る舞いにおいて、助詞「ね」を伴う場合と伴わない場合を比較した研究。**ドイツ・スウェーデン・フィンランド・カナダなど各国の**

	Hajikano	study of Ne-marked other-repetitions in Japanese talk-in-interaction		第一線の研究者達とともに招聘を受けて参加した。

○資料 17　組織単位での研究成果の質の高さを示すその他の研究活動

年度	研究者	タイトル	学会・研究会等	研究概要（研究内容、外部評価等）
平成26	中里見敬、岩佐昌暲（名誉教授）	国際シンポジウムの主催（平成 27 年３月）（日本郭沫若研究会、日本現代中国学会、言語文化研究院共催）	“清末民初期赴日中国留学生与中国現代文学”日中学術研討会	本国際シンポジウムの成果として、24 編の論文を収録し 245 ページからなる、『“清末民初期赴日中国留学生与中国現代文学”日中学術研討会論文集』を出版した。同論文集はさらに編集を加えて、台湾の花木蘭出版社より改めて刊行される予定。

○資料 18　FLC 叢書（出版社はすべて花書院）

年度	研究者（著者）	標題
平成 22	Michel、 Wolfgang（単著）	*Der Ost-Indischen und angrenzenden Königreiche vornehmste Seltenheiten betreffende kurze Erläuterung: Neue Funde zum Leben und Werk des Leipziger Chirurgen und Handelsmanns Caspar Schamberger*
平成 23	Tanaka、 Toshiya（単著）	*A Morphological Conflation Approach to the Historical Development of Preterite-Present Verbs: Old English、Proto-Germanic、 and Proto-Indo-European*
平成 23	濱 一衛（著訳）・中里見 敬（編集）	『中国の戯劇・京劇選』
平成 23	古村由美子（単著）	『成人バイリンガルの「断り」場面における対人葛藤対処方法に関する研究』
平成 23	江口 巧（単著）	『日英語の分析―意味と形式のおりなす調和―』
平成 23	鈴木右文（単著）	『仮想空間文字チャットによる英語対話演習授業』
平成 24	李 相穆（単著）	『マルチメディアと外国語教育』
平成 24	鈴木隆子（単著）	『ザンビアの複式学級―アフリカにおける万人のための教育（EFA）達成を目指して―』
平成 24	Inaba、 Miyuki（単著）	*Capitalism for the Poor: Does Microenterprise Work in the Developed World?*
平成 26	内田 諭（単著）	『フレーム意味論に基づいた対照の接続語の意味記述』
平成 27	中里見敬・李麗君他（共編）	『濱文庫所蔵唱本目録』

○資料 19　学会役員就任状況（平成 22 年度～27 年度）＊

学会名	役職名	会員数（概数）
日本英語学会	評議員	1,400
英語語法文法学会	評議員、編集委員	500
e ラーニング教育学会	理事	100
日本ディベート協会	九州支部長	130
日本韓国語教育学会	九州・沖縄地区理事	100
日本イスパニア学会	理事	400
日本英文学会	理事、評議員、編集委員、九州支部長	3,200
日本シェイクスピア協会	委員、編集委員	600
日本アメリカ文学会	代議員、九州支部長	1,500
日本独文学会	西日本支部長	1,800
日本フランス語フランス文学会	九州支部長	1,400
日本中国学会	評議員	2,000
国際魯迅学会	日本代表理事	100
International Consortium for Social Development Asia-Pacific Branch	Treasurer	300

日本地域福祉学会	国際交流委員会委員	1,700

*第２期中期計画期間中の役職。年次経過とともに役職期間が終わったものも含む。

２－１－（２）　研究院の研究成果の学術面及び社会面での特徴

本研究院の研究成果の学術的・社会的特徴を資料 20～22 に示す。ディベート活動は大学生のみならず、一般社会人、産業界までを対象とし、大きな社会的意義を持つ。辞書の刊行、英語学習用ハンドブックの刊行は、語学教育を通じて大学教育の国際化に裨益するものである。公開講座の開講、一般市民を対象とした講演会の開催は、研究成果の社会的還元方の一つの重要な方途である。

○資料 20　研究成果の学術面及び社会面での特徴を示す研究成果

年度	研究者	発表標題等	研究概要	外部からの評価
平成 13～現在	井上奈良彦	ディベート活動	一般市民、地域社会及び産業界等を対象として、日本語ディベート大会を開催し、全国から出場チーム（中学生から社会人まで）を集め、ディベート活動の普及に貢献。また、英語と日本語による様々なディベート普及の活動を国内外で実施。	活動を紹介する言語文化研究院のサイト http://flc.kyushu-u.ac.jp/~debate/ は、ネット検索でトップにランクされる（平成 27 年 10 月 4 日現在 Google で debate education Japan を検索）。九州大学公式 YouTube サイトの動画は１万回以上再生される人気動画である（九大サイト内の人気動画４位と５位、Google の動画検索 debate で２位、debate education Japan で１位）。
平成元～現在	福元圭太、津村正樹、恒川元行、山村ひろみ	辞典の編纂	『アポロン独和辞典』『新アポロン独和辞典』（福元・津村）、『アルファ独和辞典』『新アルファ独和辞典』『アクセス独和辞典』（恒川）、『デイリーコンサイス西和・和西辞典』（山村）の執筆・編纂	左記の各独和辞典は、主として大学におけるドイツ語学習者の多くに利用されている辞書で、特に『アポロン独和辞典』（第３版）は近年、独和辞典の売り上げで、全国シェア第１位を占めている。また『コンサイス西和辞典』も最近その数が大幅に増加しているスペイン語学習者に広く支持されている。
平成 26	田中俊也 江口 巧 大津隆広 鈴木右文 Laker、Stephen	『九大英単―大学生のための英語表現ハンドブック』（研究社）	平成 24 年度～25 年度の九州大学「教育の質向上プログラム（EEP）」の支援を受け、本研究院英語科教員が中心となって開発した、基幹教育英語新カリキュラムに適した「英語語彙表現ハンドブック」。	本学入学後１年次に最低限習得すべきである語彙・表現を厳選したハンドブック。低年次学生の語彙力増強を目的とする。本学の新学術英語カリキュラムにおいて使用されている。文献情報は下記 URL 参照。 http://webshop.kenkyusha.co.jp/book/978-４-327-45259-９.html

○資料21　公開講座の実施状況

年度	研究者（代表世話人）	共通テーマ、講師、講座内容等
平成 23	田中俊也	21 世紀の教養教育―開かれた柔軟な知を目指して― 第１講　「教養とは何か」とは何か―ドイツ「教養」論の系譜―（福元圭太） 第２講　哲学・思想はいかにして〈教養〉として生き残ることができるか（佐藤正則） 第３講　知らないことをいかに語るのか―知識でもデータベースでもない教養とは？（阿尾安泰） 第４講　21 世紀の教養教育の実態と課題（淵田吉男、高等教育開発推進センター教授） 第５講　アメリカの高等教育と国連勤務を通して（稲葉美由紀） 第６講　外国語ができることは、教養人か？（山下邦明）

平成 25	吉村治郎	文学と人生―英・米・独・仏・中・日に見る文学と人生の織りなす情景― 第１講　アメリカ文学の中の「お金」―「お金」から眺める人間関係（下條恵子） 第２講　放浪の文学者D. H.ロレンスと文学（吉村治郎） 第３講　自伝とアメリカ文学 ―実人生を作品で描くことについて（岡本太助） 第４講　フランス文学に現れる「読者」の系譜（佐藤典子） 第５講　ゲオルク・ビューヒナーの人と作品（津村正樹） 第６講　児童文学と人生の選択肢―ジェンダーと多文化主義の視点から（谷口秀子） 第７講　明治日本と清末中国における『椿姫』の翻訳（中里見敬）
平成 27	江口　巧	ことばの諸相―コミュニケーションの媒体としてのことばのしくみ― 第１講　言葉を使って事をなす方法―日常会話に見る文法の働き（横森大輔） 第２講　英語の音声―発音やリズムの技法（鈴木右文） 第３講　日本語のポライトネス（松村瑞子） 第４講　スペイン語のしくみ―スペイン語と日本語を比べてみよう（山村ひろみ） 第５講　現代英語を歴史的にさかのぼる―歴史・比較言語学の試み（田中俊也） 第６講　漢文と中国語は違うものか？（西山 猛） 第７講　英語の情報構造―重要な情報はどこに現れるか？（江口 巧）

○資料22　一般市民を対象とした講演等

年度	研究者	講演標題	講演内容	講演依頼者等
平成23	谷口秀子	知らないうちにハマってる？シンデレラの罠！	子ども向けの物語に見られるジェンダー	糸島市男女共同参画センター主催の市民向けセミナーでの講演（平成 23 年 8 月） http://www.city.itoshima.lg.jp/site/danjo/23-seminar-report.html
平成24	稲葉美由紀	障害のある本人・親のはざまで	コミュニティワークと障害を持つ人々へのエンパワーメント実践について	香春町社会福祉協議会広報（平成 25 年 1 月）に「障害者福祉問題セミナー」についての記事が掲載された。
平成25	稲葉美由紀	①先進国日本の社会福祉 ②経済的な課題への取り組み、相談から地域支援へ ③組織化後の関わりは？	①開発途上国と比較した先進国日本に関する社会福祉の実態：相対的貧困と格差 ②生活困窮者の経済的問題（しごと）と生活支援（家計、育児、子育てなど）など包括的な側面からの支援の必要性 ③当事者団体とコミュニティワークをつなぐ実践方法について	①平成 25 年 10 月、福岡県筑後市社会福祉協議会 ②平成 25 年 11 月、福岡地域福祉活動職員連絡会 ③平成 26 年 1 月、福岡県地域福祉活動職員連絡会、研修事業

（水準）
期待される水準を上回る

（判断理由）
（１）<u>刊行された論文・著書が関連学会等において高評価を得ている</u>（資料13～15）。
（２）国内外のレベルの高い<u>学会・研究会等で研究発表を活発に行っている</u>（資料 16）。
（３）本研究院教員を主体とする学会・研究会の開設・運営を積極的に実施、国際的に高い評価を得て、海外の出版社から成果の公刊が見込まれるものもある（資料 17）。
（４）本研究院発行の<u>FLC 叢書は 11 巻が既刊</u>（資料 18）。そのうち<u>２巻が内外の高評価を得ている</u>（資料 15）。
（５）本研究院の教員の多くが<u>関連学会において先導的役割</u>に就き（資料19）、関連学術活動におけるリーダーとしての責務を果たしている。
（６）<u>社会的意義をもつ学術活動を展開</u>し（資料20）、研究成果の社会的還元に積極的に取り組んでいる（資料21～22）。

Ⅲ　「質の向上度」の分析

（１）分析項目Ⅰ　研究活動の状況

第１期中期目標期間と比較して質の向上があったと判断される。

①資料 23 に示すように、**論文・著書等の研究業績や学会発表件数が顕著に増加**している。

○資料 23　期間別論文・著書・学会研究発表件数

	平成 16～19 年度（４年間）	平成 22～27 年度（６年間）
論文	154（年平均 38.5）	284（年平均 56.8）
著書（教科書、辞書、訳書を除く）	32（年平均 8）	80（年平均 13.3）
学会研究発表	131（年平均 32.8）	304（年平均 50.7）

＊第１期（平成 16 年～19 年度）の研究活動状況については、第１期現況調査表 5 頁参照。

②資料 24～25 に示すように、第２期中期計画期間において**国際学会発表件数が飛躍的に増加**している。

○資料 24　平成 16 年～19 年度国際学会等研究発表（講演を含む）件数

平成 16 年度	平成 17 年度	平成 18 年度	平成 19 年度	**年平均件数**
4	2	8	8	**5.5**

＊第１期のデータについて、第１期現況調査表 11-12 頁参照。

○資料 25　平成 22 年～27 年度国際学会等研究発表件数

平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	**年平均件数**
17	13	15	23	26	38	**22**

③資料 26 に示すように、**科学研究費補助金の採択件数・採択率が大幅に向上**している。

○資料 26　年度別科学研究費補助金採択件数・採択率・獲得率

	平成 19 年度	平成 27 年度
採択件数／申請件数	15	30
採択率（採択件数／申請件数）	42.9%　(15／35)	62.5%　(30／48)
獲得率（獲得件数／部局現員数）	34%　(15／44)	62.5%　(30／48)

＊第１期（平成 16 年～19 年度）の科研費採択状況については、第１期現況調査表６－７頁参照。
＊科研費申請資格を有しない外国人教員２名は、部局現員数に含まない。

第１期中期計画期間中の平成 19 年度に比して、採択件数は２倍になった。これは近年、博士号取得者の積極的採用など研究実績重視の人事を進めてきた成果であり、また科研費採択率向上に向けての FD 開催等の部局の努力の結実である。参考資料として平成 19、平成 21、平成 27 年度の博士学位取得者数を資料 27 に示す。

○資料 27　博士学位取得者数

	平成 19 年度	平成 21 年度	平成 27 年度
博士学位取得者数（国内）	3	3	17
博士学位取得者数（国外）	7	5	14*

*国際教育教員（特定プロジェクト教員）４名を含む。

以上、研究力を強化し、その成果を積極的に発信するという部局の方針に沿った研究活動を旺盛に展開していると判断される。

（２）分析項目Ⅱ　研究成果の状況

研究活動の量だけでなく、その質も向上している。

国際誌へ積極的に投稿しており、**原著論文が評価の高い学術誌に掲載**されている（代表的な国際誌掲載論文については資料 14 参照）。さらに内外の関連学会で**高い評価を得た論文、著書を多数刊行**している（資料 14～15、14～17 頁）。

以上から、本中期計画期間において、より活発で質の高い研究活動を展開していると判断される。